

2006 年度循環ワーカー養成講座 第2回

「パーマカルチャーとエココミュニティ神奈川県藤野町での試み」

講師：設楽 清和氏（パーマカルチャー・センター・ジャパン事務局長）

日時：2006年7月12日（水）18：30～20：30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー）

私たちはパーマカルチャーについて学ぶ 72 時間のコースを主催していますが、今日は 2 時間でパーマカルチャーとエココミュニティについて話をする、というリクエストを頂いていますので、パーマカルチャーとエコビレッジについて、かいつまんでお話することにしましょう。

今年の循環ワーカー養成講座のテーマは「エココミュニティ」だそうですね。これは「エコロジー」と「コミュニティ」から成っていますが、それぞれが非常に深いテーマだと思います。エコロジーは、生物と生物の間、あるいは生物と非生物、それから人間と自然との「関係性」を扱う科学です。この中に、皆さんのテーマである循環型社会、さらには持続可能な社会というものが見えてくると思います。もう 1 つのコミュニティ、この言葉は皆さん日常的に使っていらっしゃると思いますが、それがいかなるものか、あまり深く考えたことはないのではないのでしょうか。コミュニティをどのように再生していくか、というのが今後、非常に大きな課題となります。世界中のいくつかの試みを見ながら、未来の社会の 1 つの単位であるコミュニティにどのような形がありうるか、考えていきたいと思えます。「人間と自然」との関係性からなる「パーマカルチャー」、それから「コミュニティ」のモデル的なものを見ていきたいと思えます。そして皆さんはこの 2 つの中から、自分なりの「エココミュニティ」というものを見出して行って頂ければと思います。



1. パーマカルチャーとビル・モリソン氏

パーマカルチャーは、オーストラリア・タスマニア島に住んでいるビル・モリソンが 70 年代の中ごろ、大学の先生として提唱を始めました。シンボルマークは、アボリジニにとって大地創造の神であるレインボー・スネークという蛇で、日本で言えばヤマタノオロチですね。人間がもう一度、大地や自然というものの力を理解して、永続可能な地球、そして永続可能な人間の文化 Permanent culture を作っていこうという理想がこめられています。

創始者であるビル・モリソンは、野人でありながら知性を湛えている人です。私が12年ほど前、彼のやっている Permaculture Research Institute という教育機関を初めて訪ねて行った時など、腰に布を捲いただけでの格好で出てきて、度肝を抜かれました。農場を案内してもらったのですが、裸足で枝を踏んで折ったりするので、足の裏を見せてもらったところ、厚さが3センチもあって、まるでクマのようでした。

モリソンは、40歳を過ぎて初めて大学に行きました。それまでは、秋から冬にかけては陸でワラビーやカンガルーを狩り、春から夏は海でサメなどを狩る生活をしていました。パーマカルチャーは合理的で科学的ではありますが、もともとは、まさに一対一で自然と向き合ってきたモリソンさんの体験から生まれた考え方です。あるときは命がけで正面から対峙したときに、自然がどのような様相を見せてくれたか、どのように関わっていけばより多くの恵みを人間にもたらしてくれるかということ体系化して、それを科学という共通言語で表現したのです。彼は植物を全部学名で覚えており、どこの地域に行っても、その場所に合ったパーマカルチャーの形を的確に提言してくれます。

さて、彼が目指すこととは何か私は尋ねたことがあるのですが、皆さん、想像が付きませんか。モリソンは、「私は、世界中をジャングルにしたい」と答えたのです。ここに、パーマカルチャーの本質があるんですね。世界のどこであっても、雨が降って日が当たり、適度な風と温度が供給されるあらゆる土地は、森になります。森はすべての生物にとって最も恵みの多い自然の形です。人間の社会は時間の経過とともに滅びていきますが、森は生物相を変化させながらも常にあり続け、その永続性に対して人間は敬意と憧れを抱いてきました。そうした中、多くの伝統的な文化では自然を敬い、森の中に神を認めてきたのです。様々なエネルギーが絡まりあいながら常に新しい形に変化していく森の中で、世界の永続可能性を見出していこうとの意味で、モリソンはそう言ったのだと思います。

モリソンは、25年ほど前に自分の institute を作りました。太古の昔からアボリジニが守ってきた森は、約200年前から白人たちが刈り取って放牧をしたため草も生えない荒野となっていました。彼はそうしたオーストラリアの非生産的な土地を買い取り、10年かけて森を再生させたのです。森には自らを維持し、発展させていくシステムがあるのです。モリソンは自分の経験から、目の前にある森がどのような方向を望んでいるかを感じ取り、そのために人間がどのように力を貸していけばいいのか分かるんですね。その感覚を一般的な言語として最適化していったのが、パーマカルチャーです。そのようにして最も調和の取れた自然から恵みが与えられ、人間がより豊かに生きて行く社会がパーマカルチャーの望むところなのです。

2. 古くから営まれてきたパーマカルチャーとその復興

パーマカルチャーは、作物を含めてあらゆる生物が調和しながら育つことのできる「環境」を作る営みであり、自然農法よりもさらに大きな視点を持っています。いくらか人間の手を入れることで、さらに恵みの多い自然を作っていくわけですね。太古の昔から人間

も含めたあらゆる生物にとって、いかに自分たちを再生産させていくかということは永遠の課題でした。その中でたどり着いたのが自然への信仰であり、その導きによって自分たちのあり方を作ってきたのです。日本で言えば、八百万の神様ですね。バリ島の伝統的な農村では土着の神様があちこちに祀られ、森と共に生きる生活が今も残っています。まさしく「森をつくる農業」が営まれており、畑や果樹、水田が家から 100 歩以内にあり、この中で全てをまかなえる生活を営んでいます。ここでは様々な木々や作物、動物が三次元的にうまく棲み分け、互いに助け合う形で共存しているのです。

以前、貧困撲滅運動の一環として、ベトナム北部で「持続可能な農業」を教えてもらいたい、という依頼を世界銀行から受けたことがありました。ところが、「最貧困の地」と呼ばれる場所に行った瞬間、私が教えられることは何もないと悟ったのです。伝統的な農業方式は、見事に自然と調和したやり方で営まれていました。人間は森の中に住むことによって、自らの持続可能性を保障してきたんですね。パーマカルチャーの考え方は最近生まれてきたわけではなく、人間がこれまでずっと追いかけてきた社会の理想的な姿、持続的なあり方が、現代になってより分かりやすく表現されたものだと考えて頂きたいと思います。私はベトナムの人たちに「世界的に価値があるあなた方の伝統を守ってほしい」と伝えましたが、このような文化は今や絶滅に瀕しています。現在よく言われる「循環型社会」も、こうした文化の作り上げてきた「関係性」に再び敬意を払い、そしてその中に物質の循環という概念を持ち込むことで初めて成り立つと言えるでしょう。

またパーマカルチャーは、東洋だけに限った発想ではありません。産業革命が人間の生活環境を悪化させていた 19 世紀の末に英国のハワードは、自然が入り込んでいながら都市の利便性も併せ持った「田園都市」を提案しています。またスペインの建築家ガウディは、英国式庭園住宅に憧れた資産家のグエルから集合住宅の設計を依頼された際に、その基礎部分を樹木の根に似せてデザインしています。人間がよりよく生き、あるいは永遠に続くものと自分を同一化しようとしたとき、必ず森というものへ還っていくんですね。

3. レインボー・バレー・ファームにおけるパーマカルチャーの実践

ニュージーランドのレインボー・バレー・ファームは、世界で最も進んだパーマカルチャーの実践が見られる場所だと評価されています。この農場の家屋は、その土地にもともとあった石を積み直し、あるいはそこの土を使った日干し煉瓦などで建っています。そしてこの家は老朽化して住めなくなっても、そのままの土地に還る、これが本当の「循環」なのです。新たにエネルギーを投入しなければならない、アルミ缶のリサイクルと本質的に異なるわけですね。「パッシブソーラー」の考えに基づき、屋根のひさしの角度は夏の太陽光を遮る一方、冬には採光できるように計算されています。昼間の太陽光の熱は床のタイルに蓄えられて日没後も利用でき、一年を通じてほとんど暖房は要りません。台所の窓のすぐ外に植えられているブドウの木は、夏には日陰を提供し、冬には葉を落として太陽光を通してくれます。もちろん、秋にはドアを出て数歩でおいしいブドウが取れます。ま

た、屋根にはハーブなどの植物が生えています。家の中を見ると、自然木の丸みをそのまま枠組みに使ったり、川の流れを再現する模様でタイルを張ったりするなど、自然の曲線を活かした住空間になっており、これが安らぎを与えてくれます。自然は、実に様々な形で恵みをもたらしてくれるんですね。

このファームの 150 m²ほどあるキッチンガーデンはまさに森のようで、果樹があり、多年草や 1 年草類があり、水草もあります。鳩が来て虫を食べ、糞を落としていくので、除草剤や肥料を撒く必要はありません。この畑が必要としているものは、すべて自ずと供給されているんですね。家の周囲に畑があり、少し離れた場所に穀物を作っており、さらにその周りに果樹が植えられています。人間が手をかける度合いや利用する頻度に沿って配置されているんですね。ある年には長雨、ある年には日照りがあって、それに弱い作物は数を減らしてしまいましたが、一方で別の作物は残ってそれを補ってくれるので、全体としては安定して人間に恵みを与えてくれます。

彼らはこのファームを 15 年ほどかけて完成させましたが、このようなパーマカルチャーの取り組みは人びとの精一杯の努力によって世界のあちこちで生まれています。そこにいだけで十分に幸せを感じられるような、安全で美しい空間ですね。ここでは、自分自身の自己表現も可能ですし、その見返りに多くの恵みを与えられます。

ファームでは、洗濯機の脱水機を改良して果物をジュースにできるような器具がありました。人間はいろいろな形で知恵を絞って、手や足の延長線となる道具を生み出せるような経験を積み上げてきたんですね。こうした伝統は、まさに永続可能だったのです。それがここ 30 年くらいの間に捨て去られ、今では私たちは、自分ではコントロールできない、内部で何が起きているのか分からないような機械に依存しています。石油がなくなれば直ちに成り立たなくなる、もろい社会に警鐘を鳴らすべきです。

4. パーマカルチャーの可能性

森に行くと、その静けさや落ちつきの中に自らを浸してみると、非常に心の安らぎを感じます。自分の住む場所の近くに森を作れば、週末にわざわざ車を飛ばしてアウトドアに行こうとは思わなくなります。この東京では雨水が豊富に供給されていますが、森を作ることだって不可能ではないでしょう。自然はあらゆるものを私たちに与えてくれていますが、それを利用できるかできないかは、人間一人一人の知恵によるんですね。今の世代の多くは、自然が私たちに何をもたらしてくれるかを驚くほど知りません。でも本当はあらゆるものが資源になる、自然の中に無駄なものは何一つないんです。

パーマカルチャーが基礎としているのはまず、人間自身が自然から学ぶこと、そのために自然の声を聞き取れるような感性をもう一度取り戻すことです。次に、今まで人間が築いてきた様々な知恵を一般化し、多くの人々が享受できるようにした科学を身につけること、そして、自然とともに生きる伝統文化を捉え直すことです。これら 3 つを体系的に組み立てていくことで持続可能な社会を作っていくことが、パーマカルチャーの目指すところ

なのです。

現在は、子どもが健全に生きていくことができるのかということが問われる人類史上初めての時代となっています。今の子どもたちが大人になったときに果たして幸せな選択ができるのかという疑問を、最も敏感に感じ取っているのは母親という立場の女性なのではないでしょうか。環境問題など様々な社会運動の先頭に立っているのは、女性の場合が多いようです。永続的な社会を作っていくために、女性の参加も 1 つの大きなキーワードとなると思います。日本の女性にも、自らが感じ取っている問題意識を様々な形で表現し、よりよい社会のために貢献して欲しいと思います。

私たち日本人も、多くの先人が蓄えてきた知恵を引き継いで、誰もが理解できる言葉に換えていくことができるでしょう。私は築 80 年の家に住んでいますが、昔の日本の家屋は「夏を以って旨とすべし」というコンセプトのもとに建てられています。日本はモンスーン気候で、湿気と暑さのために住みにくい夏をしのぐ大事な役割が住居に求められていたのです。通気をよくするために壁がなく、骨格はほとんど柱と梁だけでできており、夏には障子を全部開け放って過ごします。伝統が息づく中で生活し、そこから様々なことを発見して行ってそれを発展させ、次の世代に伝えていくという形が、まさしく日本型のパーマカルチャーを築いていく過程ではないかと考えています。

パーマカルチャーは自給自足を基本としていますが、世界で耕作の可能な地域すべてで食べものを作ると、実は 200 億の人間に必要なカロリーを生み出せるという計算があります。所得の高さに応じて食料が極端に偏在している現実が、飢餓を生み出しているのです。ですから、現在の人口 60 億を養う「農業システム」は存在しないのですが、60 億人一人一人が自ら食べるものを作って生きていくことができる、それがパーマカルチャーの目指すところです。

私は、以前は東京でサラリーマンをしていましたが、31 歳のときこの東京で生きていくこと、会社において上司のような人間になることが自分の望むところかどうか真剣に考えました。そして、食べるものを自分の手で作ってみたら、そこから何か見えてくるのではないかと思い立ったのです。そして新潟の柏崎へ移り、市役所で農地を借りる談判をしました。幸運なことに 3 反の田んぼと 1 反半の畑を借りることができ、コシヒカリを作ることになりました。有機栽培でやっていたので高く売れ、年間 100 万円くらいの収入となったのです。海も近くにありましたし養鶏もやっていたので食べ物ほぼ自給でき、家賃と光熱費で月に 2 万円あれば十分でした。経験のなかった私でもできたのですから、皆さんにもぜひお勧めしたい。自分の身の回りで何ができるかということの一つ一つ考えていけば、できることはたくさんあります。自分自身が持っている能力に気づくのは、非常に楽しいものです。

日本における循環型社会の一番の課題は、現在はエネルギーをかけ単に廃棄物として処理されている人間の糞尿を土に還し、再び作物にするという「環」を作り出すことでしょう。糞尿には非常に多くの窒素が含まれており、これに籾殻やおが屑などの炭素分を繰り返

返し入れることで発酵が進むのです。私たちのセンターではこの原理を利用したコンポスト・トイレというものを使っており、熟成されてできた肥料で稲穂や果実を育てています。日本中でこうした試みをやれば人口を十分にまかなえる野菜や果物ができ、中国やアメリカから輸入する必要はなくなるのではないのでしょうか。

5. 「コミュニティ」への回帰

カナダのコルテスアイランドというところには原生林が残っていますが、その中へ行くと、自分の体と感情との間の隙間がなくなっていく、体がすごく軽くなっていくのを感じます。「コミュニティ」と言うと人間の集まりだけが想像されますが、言うならば私たちは地球という1つのコミュニティの一員であり、木や虫と地球の生命を分かち合って生きているのです。だから、原生林の中に身を置くと森の一部となったような感覚となるのでしょう。コミュニティとは、互いに「一体化」したものの集まりなのです。また人間は古くから言語という意味伝達の手段を使ってきましたが、同時にその言語を共有する者同士で1つのコミュニティを形成していたわけですね。

オークランドの都会にある公園では、森があつてその中で作物も育っているようなコミュニティ・ガーデンが、若い人たちを中心とした共同作業によって作られました。ニュージーランドが都会化していく中で、古くからのすばらしい自然を守っていかなければいけないことに気づいた青年たちが、自然とのつながり、人とのつながりを肌で感じながら1つのコミュニティを作っていたのです。

コミュニティを作るために一番いいのは、共同作業です。同じものを作るという行為によってお互いが持っている能力や想いを確認し、足りない部分を補い合うので、人とともに働くことの大切さを実感するんですね。パーマカルチャーの持続性の前提となるのが、この「コミュニティ」なのです。自然の恵みを一身に受けていく中で、新しい社会像が自ずと生まれてくるのではないのでしょうか。私の学校にも18くらいの若者が参加してくれています。まさしく、自分たちがこれから生きる社会がどうなるのかという大きな疑問を持っている世代です。その中から、自然という「原点」に立ち返り、人とともに生きていく環境を作ろうという動きが生まれてきていることに、大きな希望を感じます。

一方、世界のあちこちで、現代文明が入り込むに従って古くからの伝統的なコミュニティが急速に崩れていっているのも事実です。輸送機関が発達し、グローバル企業が同一のものを大量に生産して市場を拡大することでどんどん均質化が進んでいます。そして、六本木ヒルズのように自然も何もなく、隣の人が何をしているかも分からないような、非常に孤立した社会が出来上がってしまったのです。ニューヨークでも裏側に目を向ければ、無機質なビルが建ち並んでいます。そして行き着くところが、資源を奪い合う争いですね。アメリカはまさしく、大きな権力にもものを言わせて地球上を席卷している国ですが、そこではコミュニティの崩壊が進み、そして起こったのが9・11ですね。たくさんの生命が失われて憎しみが残り、その報復としてアフガニスタンでも多くの人びとが殺されて孤児た

ちが生まれました。ニュージャージー州の州都であるトレントンでは、高校を卒業する若者よりも刑務所に入る若者の数が多いそうです。人が、自然や周囲の人びとから切り離されて行き場を失ったときに生まれるのは、創造ではなく破壊だけなのでしょう。そしてお金のような実体のないものに執着し、人を傷つけるのです。日本でも最近多発している凶悪な事件は、家庭だけではなくコミュニティそのものが崩壊し、自分たちを支える拠りどころがなくなってしまった人々の心理から生まれているのでしょう。

そのアメリカが最終的に行き着いたのは、現在病んでいるコミュニティの再生でした。これから人々は行政単位ではなく、コミュニティというものをベースにして生きていくべきだと、すべての政治家が言っています。例えば都市で再開発を行う場合も、そのコミュニティの人たちに「どういうところに住みたいのか」との質問が投げかけられるわけです。そして汲み上げられたコミュニティの総意が自治体を通して国に伝わり、政策に結びつけられるのです。

6. 各地に見られる、新しい社会の形

アメリカの中でもいくつか、先進的なコミュニティを紹介しましょう。まず、70-80年代のヒッピーのコミュニティから派生していたサンド・ヒル・ファームです。人間はコミュニティの中で「人間」となるのですが、人とともに生きるということは、どこの学校でも教えていません。このファームで暮らす10人ほどの人々は、自分たちのコミュニティをどう作っていくことができるか真剣に検討し、これまで様々な試みを重ねてきました。そして「コミュニティ」というマガジンを発行する一方、多くの人、特に若者に対して、もう一度コミュニティを作るにはどうしたらいいか、1年間の研修生として学ぶ場所を開いています。そこではもちろん農業も行いますし、太陽光を利用するしくみや様々な道具を使う方法も覚えられます。薪ストーブやコンポストを活用し、自然に負荷をかけない生活をするとともに、大豆を発行させたテンペと言う食品を作ったり、とうもろこしをシロップにして売ったりもしています。農業は、あらゆる経済行為の基本なのです。食べものを作り売ること、それをコミュニティの原点とする実践を、ここでは続けているわけです。

そうした中で育っていった若い人たちが作ったのが、別のダンシング・ラビットというコミュニティでした。サンド・ヒル・ファームでは、農産物の加工などで得た収入は共同で分けていますが、ここでは、若者1人1人がホームページを作るとかコンピュータ・グラフィックスを使うような仕事でそれぞれ個別に得た収入をすべて1つの財布に入れ、それぞれの家族の人数やニーズに応じて再分配しています。ですから、仮に病気になって1、2ヶ月収入がなくてもやっつけていけるような助け合いのシステムを作り出しているわけです。近くに住んで共に働くことによって、互いに支え合いたいという気持ちが生まれてくるので、このようなしくみが成り立つんですね。自分たちのお金が保険会社の儲けになったり、戦争や多国籍企業の原資となったりするのではなく、自分たちの理想とするものに対して使うことができるのです。

ここでユニークだったのは、「スーパー・ソーラー・シャワー」でした。黒いゴミ袋に入れた水が太陽の熱で 40 度ほどに温められ、毎日のシャワーをまかなうことができます。こうしたアイデアを実践し、いかに自然エネルギーを使って自然に負荷をかけない生活ができるかという創造的な工夫が、産業にもなっていくのです。

カナダのあるエコビレッジは、子どものいる家族だけが移り住んできており、子どもの教育に特化したコミュニティです。子どもたちは学校にも行きながら、畑や小屋を子どもだけで作り、まさに「人とともに生きる」ことを生活の中で学んでいます。お互いに顔が知れたコミュニティでは、外部の人間をすぐ区別できるので安全性が高く、アメリカで非常に多くなっているシングル・マザーの女性たちも移り住んできています。日本でも単身の母親が増えていますが、彼女たちがこれからどのように収入を得て、どう子どもを育てていくかが問われています。そうしたときに、このようなコミュニティには 1 つの回答が用意されているのではないのでしょうか。

ニューヨークのまた別のエココミュニティは、4 つほどのアパートを買い取って 100 人ほどが暮らしています。その中心になっている女性は小人症なのですが、非常にマネジメント能力があり、その運営のために都会から出るゴミを再生して売る事業を起こしました。現在は市内に 4 つのリサイクル・ショップを運営しています。要らないものから価値を生み出す、まさに循環型社会の基本です。それを 1 人の収入にするのではなく、コミュニティを成り立たせるベースに充てるという、新しい経済の形となっています。新しい経済なくして、新しい社会はあり得ません。その原型が、このコミュニティにはあると言えます。そして人々は頻繁に集まり、自分では解決できない問題を周囲に相談し、真摯にアドバイスをし合うのです。100 人が集まれば、どんなに大きな力となって助け合えることでしょう。

7. 自分を表現する「場」として

「コミュニティが本来果たすべき役割は、人間の本質を成就することである」という定義に非常に感動したことがあります。それは、人間が持っているすべての能力を発揮することです。そのために多くの人間が助け合い、エネルギーが生み出されていく。それがまさしくコミュニティの機能なのです。人間には様々な面がありますから、会社のように、個人が持っている「能力」だけを評価しようとする中では、決して「成就」することはできないのです。1 人の人間が、自分の持っているすべてのものを受け入れてもらえ、その中で安心できるかということが、今非常に大きな問題となっています。それを行えるのがコミュニティなのだ、このニューヨークの中心にあるエコビレッジは物語っています。

すべての人間が持っている力の中で特に優れているのは芸術性だと思いますが、多くの人はそれを表す機会がないため、漠然としたストレスを感じています。ところがコミュニティの中ではすべてを受け入れてもらえるので、迷いなく自分を表現できるのです。ある別のエコビレッジは、「癒し」を切り口にしたリゾート的なコミュニティとなっています。自然の一員として生きるというのはどういうことか、肌で実感できるような場所で、世界

中から訪れた多くの人がワークショップなどを行うため集まってきています。学んだことを自分の地域に持ち帰って伝えることで、コミュニティを復活させようとする人たちもいます。私は息子の提案で、流木を使った小さな家を一緒に作ってみました。人間はちょっとした工夫をするだけで、生きていく空間を作り出すことが可能なんですね。日本でも、人間が自然の一部であるようなコミュニティについて、人間同士がともに学べるような場を作っていくことが必要になってくると思います。私が毎年訪れているニューヨーク州のイサカエコビレッジでは、あたかもそのコミュニティの一員であるかのように迎えてくれ、しばらくしてまた行くと「よく帰ってきたね」と声をかけてくれるので、私はとても幸せな気持ちになります。

8. エココミュニティへの発展

藤野町の取り組みでは、非常に古い家屋を買い取ってパーマカルチャーの学校を開くとともに、地元の人たちとの交流を行っています。この教室では例えば、小麦を育てて粉に挽き、窯でパンを焼いています。これが好評なんですね。若い人がたくさんやって来ますが、地元の人たちは「なぜ、こんな土地に」と興味津々のようです。田舎に住んでいると男性の結婚相手が見つかりにくいのですが、訪れる中には若い女性も多いので、「交流会でもやってみようか」という話になったんですね。1年に2回程集まって、飲んだり騒いだりしていますが、まさしく新しいコミュニティができあがりつつあります。10年前、地元の人には「オウム真理教じゃないか」と訝られていた私たちですが、今では「これが採れたから、よかったら持っていけ」という声をかけていただけるような関係ができています。

お年寄りの方たちはまさしく、持続可能な社会を作っていく様々な知恵というものを持っています。ところが今の社会ではそれが評価されないために、そんなものは役に立たないと思っている人が多いのです。そこで私たちのセンターではそういった人たちを呼び、子どもたちやその家族で集まって、昔ながらの生活とパーマカルチャーを習うセミナーも始めています。昔の遊びとして風車をみんなで作ったり、身の回りに生えている薬草を教えてもらったりしています。すると若い人たちはそこで、非常にたくさんの「気づき」を得られます。長年の蓄積を活用せずに風化させるのではなく、私たちが教えを請うことによって、お年寄りの方々も活力を得ることができます。世代を超えて受け継がれていく「知恵の循環」が、私たちのパーマカルチャーの学校を通じて起こりつつあります。「日本の伝統文化」ということだけではなく、生活そのものを少しずつ受け継ぎながら日本型のパーマカルチャーを作り上げていくステップが活発となっているのです。

「エココミュニティ」と言うと、いかにも太陽光パネルや水の再利用システムなどがあるように思い浮かべられると思いますが、もし藤野を題材として語るのであれば、「知恵の循環」こそが、私たちのコミュニティの基本であると言えます。コミュニティは、様々な装置を用意したところに人がポンと入ってできるのではなく、徐々に人と人とのつながり

ができ知恵が伝わっていき、気持ちも伝わっていったところに発生していくのです。「仕事を手伝ってやろうか」「醤油をちょっと貸してくれませんか」といったことを互いに言えるような関係ですね。また、芸術家が多く住んでいること、定期的にコンサートなども開かれていることも藤野がアピールできる点かもしれません。

エココミュニティというものを考えたときに、エコ（自然と調和した）という部分は後からついてくるのです。伝統的に地域が持っている価値というものを再評価し、私たちが持っている新しい知識と融合させることでエココミュニティは自ずと生まれてきます。1つの「コミュニティ」が出来上がっていれば、昔の人たちが持っている知恵が伝わってきますから、それを実践するだけで十分にエココミュニティは成熟していくのだと考えています。

（この記録は、参加者の真木彩子氏が記録し、設楽氏に加筆・訂正いただいたものです。）